
壊れた宝物

ごり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた宝物

【Zコード】

N7992B

【作者名】

ごり

【あらすじ】

不注意で壊れてしまった簡状アクリウム。漏れた水が滴り、出来上がった水溜りは大きいものとなり。

(前書き)

原稿用紙10枚以内という規定で書いたものですが、かなりの駄作です。もう少し短くまとめられる技術があればいいんですが・・・。

「んあ?」

青年は瞳を下に向ける。

「やべつ」

そう言つたときには既に遅い。

陶器が割れるような音が鳴る。

「あーまじかよ。めんどくせえ。誰だよこんなところにこれ置いたやつ」「やつ

無論自分しかいのだが、人間とは責任転換をしたがる動物である。

青年はゆつたりとした動きで台所に足を運ぶ。戻つてくるときは手に台拭きが握られていた。

卓上には割れた筒状アクアリウム。

中の液体が漏れていた。液体は卓上を外へと伝い、そして下に滴る。

フローリングを傷つけないために敷かれた絨毯の上には、小さな水溜りができていた。

卓上から液体が滴る度に、水溜りの水面が揺りぐ。しかしそれは均等間隔だ。

だがその法則を突如破るものがある。

台拭きだ。

青年は台拭きを乱暴に水溜りへ落とすと、今度は乱雑に吹き始める。苛立つているらしい。

「うし」

青年は絨毯から台拭きを離す。まだ湿り気が残るもの、気にするほどのものでもない。

青年はステンレスの流しに台拭きを投げ込むと、足早にベッドに潜り込む。

寝息はすぐに聞こえてきた。時計の針は2時40分を指している。部屋は暗い。音もない。だがひとつだけ異常と言えるもの、見開かれた光る双眸が卓上から青年を見下ろしていた。

「えーあれ壊しちゃったのぉ?」

少女は頬を膨らませる。

「結構お気に入りだったのに」

膨れつ面を向ける先は隣の青年。

「仕方ねえだろ。トイレ行くだけだったから電気付けてなかつたんだよ。それにあんな簡単に壊れるあのおもちゃが悪いんだつーの青年は弁解に励もうとするが、

「それは言い訳

とのことりしこ。

「第一、おもちゃじゃなくて宝物でしょ? 秀くとちつちつやいこりから大事そつにしてたじやん」

「昔と今じや物の見方が違え。『いろから』じゃなくて『は』だ。今更惜しくもねえよ」

青年は前を向いたまま言ひ。

「今失くして惜しいのはお前と金だ、ばーか」

少女はため息を吐いた。

「そこにお金が無ければ感動できたのに。まあいいや、それより今日も泊まりに行つていい?」

「んあ? ああ、いいぜ。このまま来るか?」

「うーん、と少女は悩み、

「着替えだけ。寄つてくれるよな?」

言いながら少女が指で指し示してこるのは、おそらく少女の血宅のある方向だらう。

仕方ねえな、と少年は足先の向きを変え、示された方向へと歩き始めた。

「毎回思つんだけどよ、こここの臭いおかしくねえ？」

青年は道の左側、貯水槽を見ながら言つ。

「なんかこう、ただ臭いんじゃなくて吐き気がしていくつていうか
少女は前を向いたまゝ、

「臭いところなんて全部一緒だよ。共通してるのは近くにいたくな
いつてことだけ。でも秀くんがあのアクアリウム拾つたのつてここ
なんでしょう？」

「昔は大して臭くなかったんだよここ。だからたまに遊びに来てた
んだけどよ。そういうやここで落ちて死んじまつたガキがいたらしい
な。俺も危つくその仲間入りするところだつたぜ」

「亡くなつた人に対してもう一つ」と言わないの。それに随分昔の
話だよ、それ」

少女は青年を見るが、青年は未だに貯水槽に目を向けたままであ
る。何がそんなに気になるのか。

少女はむつとし、青年に荷物を押し付けると、

「後に家に着いた方が晩御飯とか買いに行くこと」
そう言つて走り出した。

「いや、待て、おい、ふざけんな」

青年も慌てて走り出す。

誰もいなくなつた貯水槽付近。
しかし知らぬ間に、

「……」

そのまだ新しい柵の内側に男の子が一人立つていた。
全身を水に濡らした男の子が。
そこには誰もいない。

「あれ? 何の音だろ」

青年が近くのコンビニに行つてゐる間、少女は部屋で一人だ。
その部屋の中に音が響く。

「水漏れ？」

少女は音の出所を確かめようと、腰掛けっていたベッドから降りようとした。

だが床に足を付けた瞬間。

「きやつ……！」

そこは床では無かつた。

少女の体が床だつた場所に沈む。

「え？……え？」

水に浮かぶ少女は状況が理解できない。

「う……」「う……」

少女は今頃その臭いに気付く。

貯水池の臭いだ。

だが少女はその香りを嗅いでなお状況が理解できない。

「どういうこと？」

必死で浮かぼうとする少女は周囲を確認する。
家具類は沈んでいない。

「あ……」

だが少女はテーブルの上に一つの異常を確認する。
壊れたアクアリウム。

突如そのアクアリウムに手が伸びた。
誰？と思いつき少女が顔を上げると、

「だ、だがだ……ぼど」

手の持ち主の口から出るのは水と声。

「ひつ……！」

少女の顔が固まる。

「ごばじ……ごばじだ」

少女の首に手が伸びる。

部屋は狭く、少女にそれを避ける方法はない。

「いやああああああ……！」

次の瞬間、

「がつ

鈍い蓋と共に少女の意識は消えた。

「一ぢああああああああ！」

青年はアパートの階段を上りながら声を聞く。手には「ンビー袋をふり下げる。

— !

走り出した。

部屋の扉を開ける

「**総美!!** いるのか!!

青年は靴の世界に

突然後ろから肩を叩かれた。

青年は効

金に繋げ、手に渡る

「ほぐど…だが、だがだほど」

口から水と声を発する男の子。

「なつ……！」

青年はいつの間にか沈んでいた。

線をテーブルに送り、そしてひとつの異常を見つけた。

十一

昨日月付にたはすの壊れたノケアーノム
二ば、二ばじた

今、当惑する青年の首に手が伸びる。

「がつ

結局の疑問の答えも出せぬまま、鈍い「ぬき声」と共に青年は意

識を失つた。

誰もいない貯水槽付近。

しかしそのフェンスの内側に男の子が立つてゐる。

片手に壊れたアクアリウム、もう片方の手に長さの違つて二種類の髪の毛を握り、全身を水で濡らした男の子が。

「だがだ……ぼど」

男の子は口から水と声を発すると、その身を貯水槽へと投じた。水しぶきは上がらない。

水面にはアクアリウムが浮かんでいる。

そして沈んだ。

もちろんそこには誰もいない。

(後書き)

貯水槽も大きな水溜りです。男の子が現れた理由は一つの水溜りが空間を繋いだからでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7992b/>

壊れた宝物

2010年10月8日15時53分発行